出土陶磁器と交易関連文書に基づく
前近代日本＝カンボジア間交易・交流史の復元研究にむけた試論

田畑幸嗣[1]、下田麻里子[2]

はじめに

東南アジア各地で出土する 17 世紀代の日本産陶磁器の研究は、ベトナムやラオスなどの調査が中心であり（菊池 2003）、鎖国直前の日本が最大の取引相手だったとされるカンボジアについては資料に乏しく、具体的様相が不明だった。しかし近年、日本産陶磁器が内陸のアンコール地域で多量に確認され、本格的な研究が可能となってきた。さらに、これまで 13 世紀以降は消滅し、輸出はされなかったと考えられていたカンボジアのクメール陶器が九州・沖縄で出土する事が筆者らの調査により確認されつつある。また、解読不可能であった日本伝来の江戸時代クメール語書簡の解読に成功し、日本＝カンボジア往復書と関連文書から、18 世紀までの両国間の具体的な関係を捉えることが可能となりつつある。そこで本稿では、これまで問われることのなかった前近代（15～18 世紀）日本＝カンボジア間の交易・交流史の復元にむけた考古資料と文献史料の整理と、交流を可能にしたカンボジア側の社会的変化について物質文化の側面から検証を行いたい。

15 世紀後半から 17 世紀初頭の東南アジアは「商業の時代」(Reid 1988-1993)であったと考えられている。世界の多くの地域で商業化が進み、人々や商品がグローバルにつながる重要な時代(リード 2021:117)において、東南アジアが世界市場の統一に大きく寄与した時代である。しかし、これまでのカンボジア史の理解では、15 世紀を境とするアンコール時代(902-ca.1432)からポスト・アンコール時代(ca.1432-1863)への歴史変化は、植民地主義的歴史観を背景とし、14 世紀から 16 世紀までの同時代史料の欠落に由来する(北川 2009:256)「空白の 2 世紀」も相まって、アユタヤーの侵攻や水利網の崩壊といった内外要因による「栄光に満ちたアンコールから凋落の時代へ」という歴史モデルが強調され、商業の時代におけるカンボジア史は空白のままであった。

一方、近年は美術史や考古学の立場から、アンコール時代とポスト・アンコール時代の非連続性、そして後者の時代を単なる“衰退期”とみなす従来の見解は単なる研究の不足からくるものであり、近年の成果からはこうした見方を再検証すべきとの指

[1] 早稲田大学文学学術院　教授

[2] 早稲田大学文化財総合調査研究所　招聘研究員

摘が強まっている(Roche 2010;Sato and Polkinghorne 2017;田畑・佐藤 2019)。筆者らは、こうした「商業の時代」において、日本、カンボジア両国にとって双方が最大の貿易相手となりえた背景には、カンボジア側の積極的な社会経済体制の変化があったためと考えている。

そこで本稿ではまず、日本出土カンボジア産陶器、カンボジア出土日本産陶磁器、両国往復書簡・関連史料、を対象とし、資料調査と史料読解分析を通じて両国の交易・交流の様相を整理する。さらに、近年のカンボジア国内における最新の調査成果をもとに、都市およびその中の寺院構成を読み解くことによって、交易体制を可能にしたカンボジア側のおける宗教社会変化について検証していきたい。考古資料と文献史料に基づく歴史復元研究をつうじて、前近代カンボジア史と日本史を接続する複合的なアプローチの可能性について考えてみたい。

1. 前近代カンボジアと交易時代

東南アジアと「商業の時代」

前述の通り、東南アジアの 15 世紀初頭から 17 世紀半ばまでにおきた交易隆盛の時代を、アンソニー・リードは「商業の時代 the age of commerce」として概念化した(Reid1988-1993)。東南アジア諸国家の主な交易品は、胡椒、香辛料であり生薬でもあった丁子やナツメグを中心として、香木と樹脂類や、森の動物群からとれる産品（獣皮、犀角、極楽鳥、燕の巣)、海産物(真珠、鼈甲など)など多岐にわたった。こうした貿易で得た莫大な利益を用いて、重要な交易地を守り、勢力を拡大するため、これらの諸国家は、ヨーロッパから近代兵器を導入し、多くはポルトガル・日本人などの傭兵隊を有していた。

東南アジアにおける活発な交易のピークは 1570 年代から 1630 年とされており(リード 2002II:21-31)、その後 17 世紀の「危機」とされる世界史的な動きのもと、東南アジアの商業ブームは収束を迎える。17 世紀前半には日本で数次にわたって「鎖国令」が発布され、その後日本の金銀輸出抑制政策がはじまり、明朝では銀価格が平準化したことなどにより 1644 年明朝が崩壊すると、日本市場向けの生糸や鹿皮などの輸出品で利益を得ていたタイ、カンボジア、ベトナムや、中国を最大の貿易相手としていた東南アジアの港市や主要都市は甚大な影響を被った。その他、西欧や中国の造船技術の向上に伴う東南アジアの軍事力の後退、オランダ東インド会社による主要産品の独占またはそれに近い状態においたこと(リード 2021:229-236)、などの諸々の要因がかさなり、17 世紀半ばには東南アジアの多くの地域では、国際経済からの撤退を余儀なくされる。

前近代カンボジアの社会変容

こうした東南アジア全域における潮流に際して、カンボジアでは、13 世紀後半頃から、ヒンドゥー＝大乗仏教社会から、上座部仏教会への社会形態が変容しはじめる。刻文などに現れる媒体言語はサンスクリット語からパーリ語へ、そして宗教施設は大規模な石造・煉瓦造寺院から木造主体建築へと変容する。こうしたことから、この時期の「断絶」は単に史料に基づく方法論上の問題ではなく、物質文化のありかたにも大きな影響を与えた実体的な現象であると先験的に理解されてきた(田畑・佐藤 2019:37)。また、15 世紀以降のカンボジアの政治的中心地は南部へと移動する。東北タイ，ラオスの産物を集荷するセンターであるトンレサップ北岸のアンコールから、海域交易の要所を重視したメコン水系のプノンペン付近へ王都が移動する。カンボジア南部地域への移動後は、スレイ・サントー[3]、プノンペン、ロンヴェーク、ウドンと幾度と遷都を繰り替えしているが、これらの地域における考古学的調査はようやく 2015 年に開始されたばかりであり、当該時期のカンボジアの交易活動の様相や、社会体制に関する研究は十分に解明されていない。

２．日本＝カンボジアの交易・交流史の様相

カンボジアにおける日本人の足跡

『南洋日本町の研究』では，1604 年から 1616 年までに下付された朱印状の渡航先 19 地点中，逼羅が 36 隻，呂宋が 34 隻，交趾が 32 隻，東浦察が 24 隻で突出し，東京・安南渡航船がこれに次ぐとし、日本人町はこの 4 地方で発達したとされる(岩生 1966:9-10)。カンボジアの日本人町の様相については前掲書に 1 章分を割いて記述されているため(岩生 1966:85-126)、本稿では詳細は割愛するが、17 世紀の西欧側の記録などから、当時の日本人町は現在のウドンの南東、メコン河と接する地にあるポニエ・ルー村のあたりにオランダ商館などと共に置かれていたこと、その居留人口は 200 人を超えており、中には多くの切支丹も含んでおり、教会堂も建立されたこと、また、オランダ商館を含む地域を統括する日本人シャバンダール[4]が存在したこともわかっている(岩生 1966:97-112)。また、アンコール・ワットに残る日本人墨書は、主に日本人研究者によって、近世における日本とカンボジアの通交の証拠として取り上げ

---

[3] 本稿において、“スレイ・サントー”とは、プノンペンから北東 25km、メコン河とトンレ・トーチ河、そして南側のボエン・プレア（Boeng Prea）と呼ばれる湿地帯によって囲まれた地域全体を示すこととする。

[4] シャバンダールは、ペルシャ語に由来し、原義は港の王または港務長官の意である。カンボジア国王は、在住外国人及びその承認等を統制して、港務、貿易、船舶事務を管掌し、さらに土地の管理と諸外国貿易等との中間にあって、諸藩の用務を執行せしめるため、カンボジア人以外のアジア人種のシャバンダールを、各居留地等に一名ずつ選任した(岩生 1966:105)

られてきた(岩生 1966;北川 2023:62)。

２．１．書簡に見られる交易内容

カンボジアに関連する日本の史料には、長崎に入港した唐船の乗組員から聞き取った情報を集積した『華夷変態』があり、ベトナムの『嘉定城通志』や『大南寔録』とともに、カンボジアの『王朝年代記』の比較史料として使用されている。その他には、19 世紀初めに近藤重蔵が編纂した『外番通書』にカンボジア発の文書 12 通と日本発の漢文 14 通、『外蕃書翰』に 6 通のクメール語書簡写が収録されている(北川・岡本 2015:120)。

また北川らは 2013 年 11 月に、同じく近藤重蔵が幅算し、寛政九年(1797 年)の奥付が付された、東京大学史料編纂所所蔵の『外国関係書簡』に、その原型と想定される写が含まれていることを確認した。『外審通書」によると、暹羅も演文書簡とタイ語書簡を送付しているが、「外蕃書軸』や『外国関係書簡」にタイ語書簡写の収録はなく、原本の所在も不明であるとされる(北川・岡本 2015:120)。

表 1(Kitagawa 2024:8-12)は 16 世紀から 18 世紀にかけて行われたカンボジアと日本の書簡交流の概要を示すものである。この資料には、当時の外交および文化的交流の記録が含まれる。

最初の記録は 1601 年、カンボジアからの書簡が日本に贈られたものである。これは、日本からの先行的な贈答に対する返礼として行われたものであり、『外国通信事略』『通航一覧』などに記録されている。1603 年には、徳川家康がカンボジア国主宛てに書簡を送り、相互の友好関係を確認した。このような書簡のやり取りは頻繁に行われ、両国間の関係構築に大きく寄与した。

特筆すべきは、カンボジア王やその近親者から日本国主への書簡が複数回送られている点である。これらの書簡の中にはクメール語で記されたものも含まれており、一部は翻訳されているが、現存していないものも多い。特に、浮 **=**（月+勞）王嘉や握雅昭花、王舅握雅弐諸など、複数のカンボジア王族や高官が徳川家康をはじめとする日本の支配層と文書を交換している記録が見られる。

1608 年の記録では、カンボジアの浮哪王家から送られた書簡があり、これに対して徳川家康も返書を送っている。さらに、制札（prohibition-edict）や経済的・政治的合意の一環として発行された文書も含まれており、外交上の調整が図られていたことがうかがえる。

17 世紀後半から 18 世紀にかけては書簡の頻度が減少するが、1627 年には長崎の長谷川煌六がカンボジア王族と文書を交換した記録があり、1740 年以降はカンボジア国総制進六参烈巴司哲王鄭からの書簡が注目される。これらの記録は、『外蕃通書』

『異国日記』などの歴史資料に保存され、両国間の文化的・外交的関係の一端を明らかにしている。

以上の書簡交流は、当時の東南アジアと日本の歴史的背景を理解するうえで極めて重要である。本資料の詳細な分析は、地域間交流の実態や文化的影響を解明するうえで有益であり、さらなる研究が期待される。

２．２．陶磁器資料に見られる両国の交易

カンボジアの輸入陶磁器

筆者はクメール陶器の性格を踏まえ、さらにアンコール時代からポスト・アンコール時代にかけての輸入陶磁器の調査成果に基づき、次のような画期を提唱したい。

表 1

画期	年代	指標となる主な輸入陶磁器	主な器種	在地陶器等	備考	カンボジア史上の区分
I 期	9-10 世紀	越州窯、長沙窯、イスラム陶器、白磁、広東系陶器	碗、瓶、合子、壺	クメール陶器・瓦の生産開始。本格的な生産は 9 世紀末-10 世紀からか。	定窯の製品も出土するか？	アンコール時代
IIa 期	11-12 世紀	福建系白磁、徳化窯系白磁、定窯系白磁、耀州窯系青磁、龍泉・同安窯系青磁	合子、碗、碗、壺	クメール陶器・瓦の最盛期。14 世紀以降については不明な点が多い。	碗類は少数	
IIb 期	13-14 世紀	龍泉窯系青磁、徳化窯系白磁、福建系褐釉陶（磁竈窯）	合子、碗、皿・盤、瓶、壺		皿・盤は 14 世紀以降か。この段階では非常に少数。中国産のほかにタイ・ベトナム産資料出土の可能性あり。	
III 期	15-19 世紀	龍泉窯系青磁（III 期前半）、景徳鎮窯系青花、漳州窯系青花、タイ産青磁、ベトナム産青花、日本産染付（将来、ヨーロッパ産が発見される可能性も）	碗、皿・盤、壺	15 世紀以降はクメール陶器が消滅。かわって軟質の胎土に透明釉が施された軟質陶器片が確認されているが、詳細は不明。瓦もこの間にクメ	碗、皿・盤類が主体となる。青磁主体の 15 世紀-16 世紀代（IIIa 期）、17 世紀中頃から後半にかけての景徳鎮の製品増	アンコール時代末期～ポスト・アンコール時代（1431-1863）

				ール様式のものから現在のスレート状のものへと変化するか。	加期（IIIb期）、18世紀の福建産製品が急増期（IIIc期）、19世紀代の全体量の減少期（IIId期）に細分できるか。	

この画期ごとに輸入陶磁の全体的な傾向を見ていくと、器種組成では以下のような傾向が読み取れる。

第I期（9-10世紀）：合子、瓶類、壺類、碗など。数量的な傾向は今のところ不明。

第II期（11-14世紀）：合子が圧倒的で、瓶類、壺類も観察される。碗、皿・盤は少量。たとえば、12世紀代の仏教寺院であるバンテアイ・クデイでは、2011年までの全出土輸入陶磁（760点）の6割以上が合子で占められている。

第III期（15-19世紀）：合子が姿を消し、碗、皿・盤類が主体となる。壺などの容器は引き続き確認される。

また、産地ごとの傾向を地域別にまとめると次の通りとなる。

第I期（9-10世紀）：中国、イスラム圏（西アジア）。

第II期（11-14世紀）：中国（過渡期的性格をもつと考えられるIIb期にはタイ・ベトナムが出現するか）。

第III期（15-19世紀）：中国、タイ、ベトナム、日本（ヨーロッパ？）。

第I期については未だ不明な点が多いが、第I期と第II期とに共通する傾向として、食器（供膳具）と見なせる器種がほとんど見られないか、見られるとしても数量、ヴァリエーションともに限られているという特徴がある。また第II期で顕著であるが、合子が圧倒的大多数を占め、瓶類、壺類がそれに続くという器種の偏在傾向が指摘できる。ところが第III期になると、合子が姿を消し、かわって碗、皿・盤といった食器と見なせる器種が普遍化する。さらに産地も中国だけでなく、東南アジア域内や、日本からも製品がもたらされるようになる。第II期は輸入陶磁のほぼ全てが中国産陶磁であったのに対し、第III期にはタイ、ベトナム、日本産の陶磁器が出現し、産地にも大きな変化がみられる。もっとも、数量的には大多数は中国産である。

こうした器種の変化に対し、産地の変化については、陶磁器の交易品としての性格を反映したものであると考えられる。アユタヤーの侵攻、スペインによる干渉、オランダ東インド会社による商館建設、日本の朱印船交易と日本人町の成立など、ポスト・アンコール時代のカンボジアは東南アジア域内のみならず域外各地とも大きな関わりを持つようになる。こうした時代背景を考えると、第III期、すなわちポスト・

アンコール時代のカンボジアに複数の産地の輸入陶磁器がみられる事実は、陶磁器もまた交易の時代にそったものであることを積極的に意味しよう。また、今のところ出土資料として確認出来ていてはいないが、将来、17 世紀代を中心としたオランダ東インド会社のカンボジアにおける活動期と、19 世紀以降の植民地時代の遺跡からは、ヨーロッパ産陶磁器が出土する可能性が高いと筆者は考えている。

日本出土クメール陶器

15 世紀中葉の資料が主体的である首里城京の内の出土陶磁器のなかに 1 点、クメール黒褐釉に典型的な波状沈線文をもつ黒褐釉壺が出土している(図 1)。報告書ではタイ産となっているが(沖縄県教育委員会 1998:214-225)、筆者らの観察ではアンコール地域東方の窯の製品と器形・文様構成が同一であり、釉調、胎土からみてもアンコール地域東方で生産された可能性が非常に高い。また、奄美大島宇検村の屋鈍遺跡からもクメール陶器の可能性のある資料が出土している(図 1)。層位的、年代的な位置づけが難しく、あくまでもクメール陶器の可能性がある資料であると報告されている(鹿児島県立埋蔵文化財センター2009:41)。筆者もこの資料を鹿児島件埋蔵文化財センターのご厚意により実見させていただいたが、口縁部の形状や釉調などから、クメール黒褐釉の可能性は十分にあると考えている。屋鈍遺跡の資料の場合、波状沈線文のようなクメール陶器に特徴的な文様に欠け、現状では窯跡出土資料にこれと合致する器形がないことが判断を難しくしている。しかし、少なくとも首里城の資料に基づけば、流通・使用の年代は 15 世紀代までは下がるだろう。

図 1 屋鈍遺跡出土黒褐釉陶器

3.カンボジアの寺院と都市にみられる上座部仏教を基盤とした交易体制の整備

3．1　カンボジアにおける上座部仏教化と海域世界への参画準備

カンボジアが 13 世紀頃から徐々に海域世界へと参画する準備を始めていたことは、13 世紀以降のカンボジアにおける上座部仏教の社会化と深く関連していると考えられる[5]。そこで、本節では 13 世紀以降の同国の上座部仏教社会化について、寺院と

[5]上座部仏教は交易活動の活性化したもとでその権限を強化しようとした王の活動を正当化したとされる(石井 1997:155-158;奥平 994:100-104;弘末 2004: 43)。

都市という側面から検討してみたい。

カンボジアでは、13 世紀から 14 世紀にかけて、アンコール地域に上座部仏教信仰が流入し、広がりを見せたことを示す、それまでには見られなかった仏教文化現象を示す考古学資料が確認されるようになる。具体的には、新たな仏教図像表現をもつ仏像やレリーフ、そしてシーマー石(結界石)を伴う布薩堂の役割をもつ基壇遺構やストゥーパといった寺院遺構である。

図 2　本稿で取り扱うアンコール時代からポスト・アンコール時代の都市の位置

こうした上座部仏教社会化の動きは、15、16 世紀にある程度軌道にのったものと筆者(下田)は考えている。筆者は、13 世紀から 16 世紀までの初期上座部仏教遺構の聖域における類型学的な検討から、徐々に上座部仏教寺院が画一化していく様相を確認した(Shimoda 2022)。つまり、上座部仏教流入初期のアンコール地域では内発的外発的な仏教文化の受容に基づく多様な寺院構成であったものが、15、6 世紀以降のカンボジア南部地域の都市で確認される遺構の聖域形態が画一的になっていくというものである。これは、15、16 世紀頃にかけて仏教実践の形態がある程度定着したことを示していると考えられる。つまり、13 世紀前後に始まる上座部仏教社会化が、日本との交易が盛んになる 16 世紀前後に定着し、海域世界への参画準備を整えていったとみることもできるだろう。

３．２　都市と寺院の関係性からみる、カンボジア交易都市の様相

都市における寺院配置にも、こうした上座部仏教を基盤とする交易体制への移行を読み取ることができる(図 3～6)。カンボジアの内陸の都市アンコール・トムと、スレイ・サントー、ロンヴェーク、プノンペンといった南部のメコン水系沿いの都市にみられる寺院配置や形態の比較してみよう。

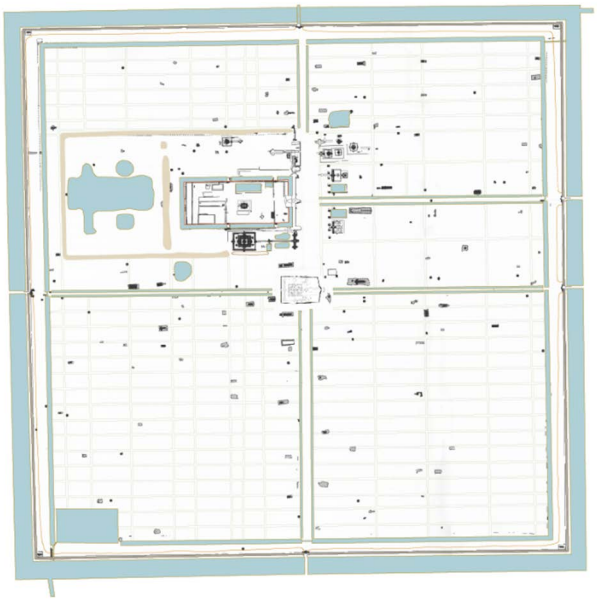
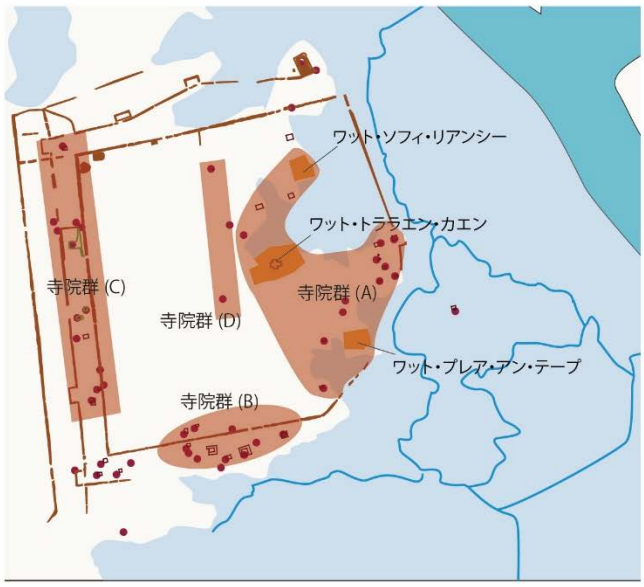


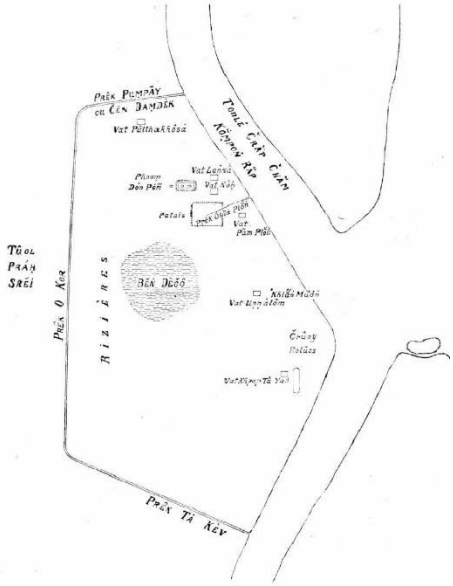
図 3　アンコール・トム

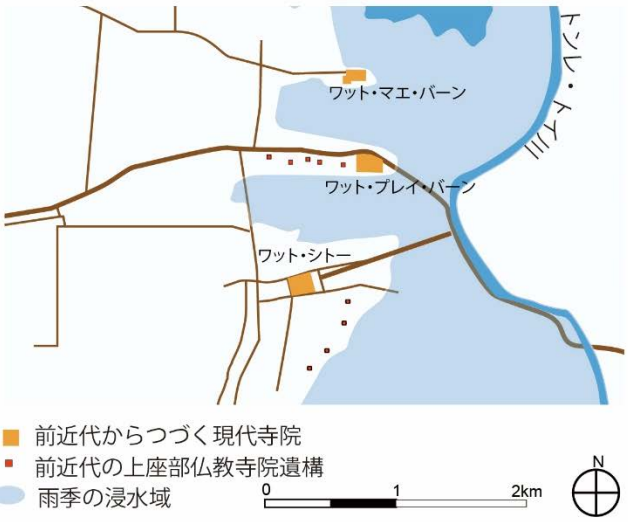
アンコール時代の都市の最終形であるアンコール・トム(図 3)は、一辺 3km のほぼ正方形を呈した城壁と堀に囲まれた都市である。城壁内では、バイヨン寺院を中心に据え、そこから東西南北に向かって大通りが伸びる。城壁内全域に小路が碁盤目状に整然とならび、都市内にある程度均一な区画を生み出している。アンコール・トムはバイヨンを世界の中心と見立てた須弥山世界観を具現化した計画となっており、13 世紀以降上座部仏教の流入後とともに 70 以上建造される上座部仏教寺院も、基本的にはそのコスモロジーを踏襲し、都市内にある程度均一に分布する(Harris 2021)。

一方、カンボジア南部に王都が移動した後の都市、ロンヴェーク地域、プノンペン、スレイ・サントーにおける寺院配置をみると、これらの都市はいずれも都市の一方を交易路である河川に接し、この河川側の正面性の重視し、外部からの景観を意識した寺院配置と都市構成となっている。

まず 16 世紀に王都がおかれたロンヴェーク(図 4)であるが、同都市はトンレサップ川の西岸の台地に建設された都市であり、北、西、南の 3 方を、南北約 2.5km、東西約 2km の土塁と掘りが囲み、東側は台地の落ち際に面する。特に西側と北側には三重の土塁が確認されており、強固な防御を施していたと考えられる。







左上図：図 4 ロンヴェーク地域図(LiDAR データ(CALI)をもとに下田作成)
上図：図 5　15 世紀プノンペン復元図 (Cœdès 1913 Pl.XIII,6)
左下図：図 6 スレイ・サントー／トゥール・バサン地域(下田作成)

ロンヴェーク内にはこれまで上座部仏教寺院、あるいは、現在はマウンドのみ残るが、上座部仏教関連遺構と考えられるマウンドの存在が 42 サイト確認される。これらのサイトは、大きく 4 つのエリアに分布する。①都市の台地淵に沿って配置されている寺院群(A)：中心寺院ワット・トララエン・カエンを含む 18 寺院、②南側第一囲郭内外に集中する寺院群(B)：8 寺院、③西側の第一囲郭と第二囲郭の間に建造された寺院群(C):13 寺院、④都市のほぼ南北中心軸上に位置する寺院群(D):2 寺院である。こうした寺院配置からは、寺院が都市の外縁部に主に配置されていることがわかる。特に、船舶が行き来するトンレサップ川浸水域沿いに最も多くの寺院が並び、往時には河川を遡上する船からストゥーパやヴィハーラを望むことができたことが推測される。囲郭内に浸水域とは関係なく配された寺院は 2 サイトのみであり、しかもこの両サイトからはいずれもアンコール時代の彫像が確認されており、16 世紀ロンヴェーク

建立以前から存在していた可能性が高い。

ポスト・アンコール時代を通じて重要な商都であり、15～17 世紀は一時的に王都となるプノンペンについては、セデスによる 15 世紀プノンペンの復元図(図 5、Cœdès 1913Pl.XIII,6)がある。これによれば、都市の東側はメコン河に面して開放されており、それ以外の北、西、南辺は方形を呈していない。16 世紀に同地を訪れたスペイン人による記述には「プノンペンにはきわめて高い 2 基の“chedi"すなわち cetiya(仏塔)がそびえており金・銀の仏像には、高さ 30 メートルに及ぶものもあり、眼にはルビーが、歯にはダイヤモンドが用いられていた」(San Antonio 1914)とあり、やはり川から仏塔を望むことができるよう寺院が配備されていたことがわかる。アンコール・トムやロンヴェークほどには厳格な方形という幾何学計画へのこだわりはなく、実利面を踏まえた柔軟な計画性が窺える。また、プノンペン交易都市の特徴である、重要な防御拠点であるという特性も踏まえており、17 世紀のオランダによるプノンペン絵図には、河川沿いには遡上する船に対抗するための砲台が置かれた様子が描かれている(Kraan 2009:Plate3)。

スレイ・サントーにおいても、同様の河川を重視した寺院配置の傾向をみることができる。15～16 世紀の中心地であった可能性の高いトゥール・バサン地域では、上述の２つの都市のような明確な都市構造は現状では確認できないものの、同じく東側の交易路であったトンレ・トイ川の雨季の浸水域に沿って３つの重要な寺院、ワット・シトー、ワット・マエ・バーン、ワット・プレイ・バーンを配する。また、筆者らの近年の調査により、浸水域沿いに多数の前近代の上座部仏教寺院遺構が確認されている一方で、浸水域からはなれた内陸部ではこれらの遺構は確認されていない。

こうした都市における寺院の配置には、各都市が重視する社会宗教基盤を反映しされていると考えられ、アンコール・トムが求心性と曼荼羅的均一性に基づく内部の景観を重視していたのに対し、スレイ・サントー、ロンヴェーク、プノンペンでは寺院の都市における役割が変化し、上座部仏教寺院を交易港の置かれる河川沿いに配置することによって、上座部仏教を基盤とした交易都市であることを明示するような配置になっている。

以上のように、寺院遺構に見られる新たな仏教文化現象は、上座部仏教の社会化を示しており、15～16 世紀にはその実践が定着したと考えられる。都市における寺院の配置も、上座部仏教と交易の関係を反映している。内陸のアンコール・トムの均一な都市計画に対し、南部の河川沿いの都市、ロンヴェーク、スレイ・サントーやプノンペンでは、交易路に面した寺院配置が特徴的であり、以上のような、上座部仏教を基盤とした都市構造、社会へと移行したことが、日本をはじめとする対外的な貿易体制を確立することができた要因として考えられるだろう。

おわりに

本研究を通じ、これまで研究が進んでいなかったカンボジアにおける日本産陶磁器の出土や、九州・沖縄で確認されたクメール陶器の存在、さらに日本伝来のクメール語書簡の解読が進展し、両国の具体的な関係の一端を明らかにすることができた。東南アジアの「商業の時代」において、両国は重要な交易相手となり、カンボジアでは宗教や都市構造の変化が交易体制を支えた。アンコール時代からポスト・アンコール時代にかけて、陶磁器の輸入や生産が変容し、カンボジア南部の王都移転を通じて海域交易が活発化した。一方で、日本人町の存在や外交文書のやり取りは、両国間の文化的・外交的関係の深さを示している。これらの分析を通じ、前近代の日本とカンボジアを接続する歴史研究の新たな可能性を提示出来たと考えている。

謝辞

本稿は、2023 年度 JFE21 世紀財団アジア・歴史研究助成を受けて実施した研究成果に基づいている。ここに記し、深く御礼申し上げたい。

引用文献

Cœdès, George. 1913. "Études cambodgiennes VIII: La fondation de Phnom Peñ au XVe siècle d'après la chronique cambodgienne." *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 13, no. 6: 6-11.

Harris, Andrew. 2021. *Early Theravāda Place-Making in the Shadow of Mount Meru: Negotiating the Architecture, Space, and Landscape of "Buddhist Terraces"/Praḥ Vihār at Angkor Thom, Cambodia c. 13th-16th Centuries*. Ph.D. diss., University of Toronto.

Kitagawa, Takako. 2024. " "Introduction of the Correspondence between Cambodia and Japan in the 17th and 18th Centuries"." In *Proceedings of the International Symposium* "After Angkor: Re-considering the Long, Silent, but Certain Socio-Religious Transformation in Cambodia.", Waseda University, June 8, 7-12.

Kraan, Alfons. 2009. *Murder and Mayhem in 17th Century Cambodia*. Leiden: Brill.

Ludivine Provost-Roche, 2010. *Les derniers siècles de l'époque angkorienne au Cambodge (env.1220 - env.1500),* Phd Diss., Université de la Sorbonne Nouvelle - Paris III.

Reid, Anthony. 1988–1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450–1680*. 2

vols. New Haven: Yale University Press.
Sato, Yuni and Martin Polkinghorne , 2017. Trade ceramics from Longvek, the 16th and 17th century capital of Cambodia Evidence from the first systematic investigations, *Journal of Southeast Asian Archaeology*, vol. 37:67-71.
San Antonio, Gabriel Quiroga de. 1914. *Brève et véridique relation des évènements au Cambodge*, translation and notes by Antoine Cabaton, E. Leroux.
Shimoda, Mariko. 2022. “A Typological Study of Theravada Buddhist Monasteries in Angkor Thom, Cambodia” , 日本建築学会計画系論文集, 第 87 巻, 第 797 号: 1347-1358.
石井米雄.1998.「上座仏教と国家形成」.『東アジア・東南アジア伝統社会の形成:16–18 世紀』,岩波講座世界歴史 13:151–171.岩波書店.
石井米雄.1998.「上座仏教と国家形成」『東アジア・東南アジア伝統社会の形成:16-18 世紀』岩波講座世界歴史 13,岩波書店:151-171.
岩生成一.1940『南洋日本町の研究』東京:南亜細亜文化研究所.
奥平龍二.1994.「上座仏教国家」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』、90–108.東京: 岩波書店.
菊池誠一.2003.『ベトナム日本町の考古学』.高志書院.
北川香子,岡本　真.2015.「17 世紀初頭カンボジア日本往復書簡について」.『東南アジア』44:120-141.
北川香子.2009.『アンコール・ワットが眠るころ』.東京:連合出版.
北川香子.2023.「ポスト・アンコール時代のアンコール・ワット詣で―アンコール・ワット近世碑文 IMA と日本墨書から」.『東南アジア』52:61–83.
田畑幸嗣・佐藤由仁 2019.「前近代カンボジアの社会＝宗教変容理解に向けての考古学的アプローチ：アンコール時代と後アンコール時代の『断絶』を超えて（改訂版）」『港市・交流・陶磁器―東南アジア考古学研究―　菊池誠一先生・坂井隆先生退職記念論文集』東京.雄山閣:111–123.
田畑幸嗣 2008『クメール陶器の研究』雄山閣
田畑幸嗣 2014「カンボジア、アンコール時代からポスト・アンコール時代にかけての輸入陶磁器編年試案」新田栄治先生退官記念論集編集委員会(編)『新田栄治先生退職記念論集」:79-90.
田畑幸嗣 2017「前近代カンボジアにおける陶器生産」佐々木達夫(編)「中近世陶磁器の考古学」第 5 巻:259-296 雄山閣.
田畑幸嗣 2019「祭儀の器としてのクメール陶器」肥塚隆(編)『アジア仏教美術論集:東

南アジア」:495-530 中央公論美術出版.
弘末雅士.2004.『東南アジアの港市世界　地域社会の形成と世界秩序』.東京:岩波書店.
リード,アンソニー.2021.太田敦他訳.『世界史の中の東南アジア』上下巻.名古屋:名古屋大学出版会.
リード、アンソニー.2002.平野秀秋,田中優子訳『大航海時代の東南アジア II』東京:法政大学出版局.

表１　Cambodia—日本関係文書表(Kitagawa2024 をもとに編集)

	年	A Cambodia からの書簡	B 日本からの書簡
	～1601	「The 6th year of Keicho, the 8th year of the ox（慶長六辛丑年)、柬埔寨 Cambodia が初めて書簡と物を贈ってきた。ただし文中には、これ以前にこちらから書簡と物を贈ったことへの返礼である旨が書かれていた」 [外国通信事略 Gaikoku Tsusin Jiryaku、外蕃通書 Gaiban Tsusho、通航一覧 Tsuko Ichiran]	
1	～1603	●柬埔寨国主 Lord of Cambodia からの書簡（lost）[Gaiban Tsusho]	●徳川家康 Tokugawa Ieyasu から Lord of Cambodia への書簡[異国日記 Ikoku Nikki、異国往来 Ikoku Orai 、 Gaiban Tsusho 、 Tsuko Ichiran]
2	1603	●Cambodia から lord of Japan への書簡 [外国関係書簡 Gaikoku Kankei Shokan、外蕃書翰 Gaiban Shokan、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文 : Cambodia 王から日本への友好の書簡[Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan]	●Tokugawa Ieyasu から Lord of Cambodia への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
3	1605	●lord of Cambodia 浮=（月+勞）王嘉 Fu Lao Wang Jia から king of Japan への書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文 : Cambodia 王から *Ñipon Kakacho* への友好の書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan、Noël Peri の仏訳]	●Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia Fu Lao Wang Jia への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]

4		●lord of Cambodia Fu Lao Wang Jia から Great king of Japan への書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文：Cambodia 王から *Ñipon Kakacho* への友好の書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan]	●Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia Fu Lao Wang Jia への書簡 [Ikoku Nikki 、 Ikoku Orai 、 Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
5		●Cambodia の握雅招花 Wo Ya Zhao Hua から king of Japan への書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan 、 Gaiban Tsusho 、 Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan]	●Tokugawa Ieyasu の書簡 [Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
6	1606	●subjects of Cambodia である握雅老元輔 Wo Ya Lao Yuan Fu およびその子握雅潭二主 Wo Ya Tan Er Zhu から king of Great Japan への書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan 、 Gaiban Tsusho 、 Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文：*Okña Srei Akkearéach* と *Okña Thoamméa Décho* から *Sdech Ñipon* への書簡 [Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan、Noël Peri の仏訳]	●Tokugawa Ieyasu から subjects of Cambodia である Wo Ya Lao Yuan Fu およびその子 Wo Ya Tan Er Zhu への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
7			●Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
8	1607	●握仔昭花 Wo Zi Zhao Hua of Cambodia の書類（文引）、日付は太歳丁未年（the 4th year of the sheep）肆月（the 4th month）初一日[泰長院	

		文書 Taichoin Monjyo]	
		●握雅老元輔握仔昭花 Lao Yuan Fu Wo Zi Zhao Hua of Cambodia の書類（文引）、日付は太歳丁未年（the 4th year of the sheep）四月十二日 [Taichoin Monjyo]	
9	1608	●浮哪王家 Fu Na Wang Jia of Cambodia から lord of great Japan への[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文（lost）[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho]	(1)Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia への書簡[Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
			(2)Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia Fu Na Wang Jia への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
10		●王舅握雅弐諸 Wang Jiu Wo Ya Er Zhu から lord of great Japan への書簡[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]	●Tokugawa Ieyasu から Wang Jiu Wo Ya Lao Ye of Cambodia への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
11			●Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia 宛ての prohibition-edict（制札）、日付は Keicho 慶長十三年戊申（the 5th year of the monkey）八月六日[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
12	1610	●lord of Cambodia 六識暦王嘉から king of Great Japan への書簡[Ikoku Nikki、Ikoku Orai、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]	●Tokugawa Ieyasu から lord of Cambodia への書簡[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
13	1627	●理諸般務事把水招笨雅珠歴蘇 Ba Shui Zhao Ben Ya Zhu Li Su of Cambodia から大日本国大柱国長崎長谷川煌六殿大人 Hasegawa Gonroku of Great Japan への書簡[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]	●Hasegawa Gonroku から Ba Shui Zhao Ben Ya Zhu Li Su of Cambodia への書簡[Ikoku Nikki、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]
14			●Hasegawa Gonroku から royal family of Cambodia への書簡[Ikoku

			Nikki 、 Gaiban Tsusho 、 Tsuko Ichiran]
	1692	●lord of Cambodia からの書簡（lost）「the 5th year of Genroku, the 9th yearof the monkey（元禄五壬申年)、lord of Cambodia が書簡を送ってきた」[Tsuko Ichiran]	
15	1727	●subject of Cambodia である六仏嬌花 Liu Fo Jiao Hua から king of Japan への書簡[Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]	
16	1740	●柬埔寨国総制進六参烈巴司哲王鄭 Mac Thien Tu の書簡[Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran]	
17	1742	●柬埔寨国大総制進爵六参烈巴司哲王鄭 Mac Thien Tu から king of Japan への書簡[Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan、Gaiban Tsusho、Tsuko Ichiran] ●Khmer 語文 : Preah Sotoaot から *As Chumnum Preah Nokor Yipun* への友好の書簡[Gaikoku Kankei Shokan、Gaiban Shokan、Noël Peri の仏訳]	